宮城県文化財調査報告書第212集

# 下 富 前 遺 跡

# 序　　文

ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保護・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、その一方で道路建設や住宅造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも、土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との係わりが生じた場合には重要な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は栗原市瀬峰町富地区におけるほ場整備事業に伴う暗渠排水工事に先立って実施した下富前遺跡の発掘調査報告書です。

下富前遺跡は縄文時代から奈良・平安時代、中世にまで及ぶ複合遺跡として知られ、今回の調査により遺跡の性格をこれまで以上に解明する上で貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成19年３月

宮城県教育委員会

教育長　佐々木　義　昭

# 例　　言

１．本書は、栗原地方振興事務所との協議に基づき実施した、ほ場整備事業（暗渠排水工事）に伴う下富前遺跡の発掘調査報告書である。

２．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

３．本書の第１図は国土交通省国土地理院発行の「高清水」(1/25,000) の地形図を複製して使用した。

４．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＥ：井戸跡　　ＳＫ：土壙

５．本書で使用した遺構番号は、調査区毎に遺構略号と発見された順番を組み合わせたものである。

６．土色の記載にあたっては、『新版　標準土色帖　1994年度版』(小山・竹原：1994)を使用した。

７．本書は調査担当者との協議の後に、執筆・編集を菊地逸夫が行った。

８．発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

# 調　査　要　項

遺　跡　名：下富前遺跡（しもとみまえいせき）（宮城県遺跡地名表登載番号46047）

所　在　地：宮城県栗原市瀬峰町大里字下富前

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 期 間：平成18年10月30日～11月24日

調 査 面 積：1,350㎡

調　査　員：菊地逸夫　柳澤和明　安達訓仁（栗原市教育委員会）

調 査 協 力：栗原地方振興事務所　栗原市教育委員会　地権者一同

# 目　　次

Ⅰ　はじめに…… 1
Ⅱ　調査に至る経過…… 3
Ⅲ　調査の方法…… 3
Ⅳ　調査の成果…… 5
　　東区…… 5
　　西区…… 9
Ⅴ　ま と め…… 11

# Ⅰ　はじめに（第１図）

下富前遺跡は宮城県栗原市瀬峰町大里字下富前に所在する。遺跡は瀬峰の中心部にある旧瀬峰町役場から南に約１km離れた地点にあり、JR東北本線瀬峰駅の南西約800mの所に位置している。

栗原市は宮城県北西部、大崎平野の北側にあたり、その中で瀬峰地区は南東端に位置し、大崎市・登米市と境を接している。瀬峰地区の地形を概観すると、東西に延びる４つの丘陵部とそれらを解析するように流れる瀬峰川、小山田川，萱刈川の河川により形成された沖積地や河岸段丘の平地部からなっている。標高は平地部では７～10m、丘陵部でも30～50m程度で、最も高い地点でも100mを越える箇所はみられない。遺跡は４つの丘陵の中で北から２番目の寺沢丘陵の南側に広がる低位段丘上に位置する。段丘は丘陵と小山田川に挟まれた形で200～400mの幅を保ちながら高清水周辺から長さ５kmほど続き、遺跡はその東端近くに位置している。段丘面は概ね平坦であるが遺跡の存在する近辺は周囲と比べ若干高くなっている。遺跡の南側は小山田川が東流し、さらにその南には沖積地が広がる。この沖積地は、現在水田等に利用されているが、ほとんどは17世紀後半の橋本宗円に始まる何度かの干拓（開拓）事業によって得られたもので、それ以前は蕪栗沼が広がる湖沼地帯およびそれを取りまく湿地であったと考えられる。

なお、この周辺は水害の常襲地として知られ、昭和22年のキャサリン台風、同23年のアイオン台風による水害の際には小山田川の堤防造営のため遺跡周辺から大規模な土取りが行われている。また、同30年代にはこの周辺で大規模な開田事業が行われ、遺跡付近は大きく削平を受けている。

本遺跡についてはほ場整備事業に伴い、瀬峰町教育委員会が平成11・14・15年に合計８次にわたる確認調査および事前調査を実施している（瀬峰町：2000.2002.2004）。その結果、竪穴住居跡８軒・掘立柱建物跡９棟・材木塀跡１・井戸跡12基・溝跡34条など多数の遺構が検出された。これらの遺構は８世紀から13～14世紀にかけて形成されたもので、遺跡全体は８世紀代には竪穴住居で構成される集落が造られ、９世紀初頭にはこれに掘立柱建物を加えた集落へと代わり、10世紀前葉頃には大形の掘立柱建物や材木塀による区画からなる一般的な集落とは異なる性格の遺構群が存在すること、13～14世紀には溝によって囲まれた屋敷が成立したことなどが明からされている。

下富前遺跡周辺の遺跡としては、遺跡の南東に位置する蕪栗沼に臨む周囲の丘陵端部には登米市長者原貝塚（2）・大崎市中沢目貝塚（4）・同恵比須田遺跡（3）などをはじめとする縄文時代の貝塚や集落跡が数多くあり、ここを生活の基盤として古くから人々の生活が営まれていたことが窺える。弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡と比べると非常に少なく、長者原貝塚や大境山遺跡（6）から若干の遺物が採集されているにすぎない。古墳時代になると遺跡の数は増加し、二ツ谷遺跡（7）からは古墳時代前期の竪穴住居跡が、泉谷館跡（18）からは後期の竪穴住居跡（11軒）が検出され、後者からは在地産の土器とともに関東系の土師器も出土している（安達：2004）。古代の遺跡は最も多く、本遺跡の同一段丘上で西側に隣接する桃生田前遺跡（23）からは８世紀前半の竪穴住居跡４軒や13～14世紀にかけての溝によって囲まれた屋敷が検出されており（瀬峰町：2000）、構成や地形的にみて下富前遺跡と連続するものと考えられる。また、遺跡北側の寺沢丘陵上には大境山遺跡や岩石遺跡など

| № | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | № | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 | № | 遺跡名 | 立地 | 種別 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | **下富前遺跡** | 段丘 | 散布地 | 縄文・奈良・平安・中世 | 12 | 荒町遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古墳・古代・中世 | 23 | 桃生田前遺跡 | 沖積平野 | 集落 | 古代・中近世 |
| 2 | 長者原貝塚 | 段丘 | 貝塚・集落 | 縄文前～晩・弥生・古代 | 13 | 四ツ壇原遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古代 | 24 | 北長根東遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古墳 |
| 3 | 恵比須田遺跡 | 丘陵斜面 | 散布地 | 縄文早～晩 | 14 | 筒ヶ崎遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文前・古代・中世 | 25 | 伊勢堂館跡 | 丘陵 | 散布地・館跡 | 縄文・古代・中世 |
| 4 | 中沢目貝塚 | 丘陵 | 貝塚 | 縄文中・奈良・平安 | 15 | 伯耆ヶ崎遺跡 | 丘陵 | 集落 | 縄文・古代 | 26 | 砂田遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 |
| 5 | 岩石遺跡 | 丘陵 | 集落 | 縄文後・晩 | 16 | 長者原Ⅰ遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 | 27 | 四ツ壇遺跡 | 丘陵 | 散布地・塚 | 古墳？･古代 |
| 6 | 大境山遺跡 | 丘陵 | 集落 | 縄文･弥生･古墳･奈良･平安 | 17 | 下藤沢Ⅱ遺跡 | 丘陵 | 塚 | 中世・近世 | 28 | 下藤沢Ⅰ遺跡 | 丘陵 | 集落 | 古代 |
| 7 | 二ツ谷遺跡 | 丘陵 | 集落 | 古墳・古代 | 18 | 泉谷館跡 | 丘陵 | 集落・城館 | 古墳・古代・中近世 | 29 | 伸萌中遺跡 | 丘陵麓 | 散布地 | 縄文後 |
| 8 | 泉谷遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古墳・古代 | 19 | 古塚遺跡 | 丘陵 | 散布地・塚 | 古代・中近世 | 30 | 民生病院裏遺跡 | 丘陵 | 集落 | 古代 |
| 9 | 鼻欠遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 縄文・古代 | 20 | 清水山Ⅰ遺跡 | 丘陵 | 集落 | 古代 | 31 | 長者原Ⅱ遺跡 | 丘陵 | 集落 | 縄文・古代 |
| 10 | 桃生田遺跡 | 沖積平野 | 散布地 | 古代 | 21 | 坂ノ下浦遺跡 | 丘陵 | 集落 | 縄文・古代 | 32 | 一本松遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 |
| 11 | 下山遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 | 22 | 坂ノ下浦Ⅱ遺跡 | 丘陵 | 散布地 | 古代 | 33 | 四ツ塚遺跡 | 丘陵 | 塚 | 平安？ |

第１図　下富前遺跡と周辺の遺跡

があり、大境山遺跡からは８～10世紀にかけての大規模な集落跡が検出されている。

## Ⅱ　調査に至る経過

本遺跡周辺は平成15年までにほ場整備事業により田面および用排水路の工事が完了している地区であるが、地権者から暗渠排水の設置を要望する声が高まり、同事業最終年度の今年度事業として暗渠排水工事が計画されたものである。

こうしたことから栗原地方振興事務所農業農村整備部、栗原市教育委員会文化財保護課、宮城県教育委員会文化財保護課の三者は、７月27日に当該地区における暗渠排水工事計画と当遺跡とのかかわりについて現地協議を行い、稲刈り後に確認調査が必要であり、遺構に影響のない工法変更も含めた再検討を要望し協議書の提出をもとめた。

栗原地方振興事務所は平成18年８月９日付けでこのことに対する協議書を提出した。これに対し、平成18年８月21日付けで当該地に対する遺構確認調査が必要であると回答し、10月16日に地権者を交えた四者による現地協議を再度行い、現地調査の主体者・期間・調査目的と対象地等を決定した。

確認調査は10月30日～11月24日に行われた。

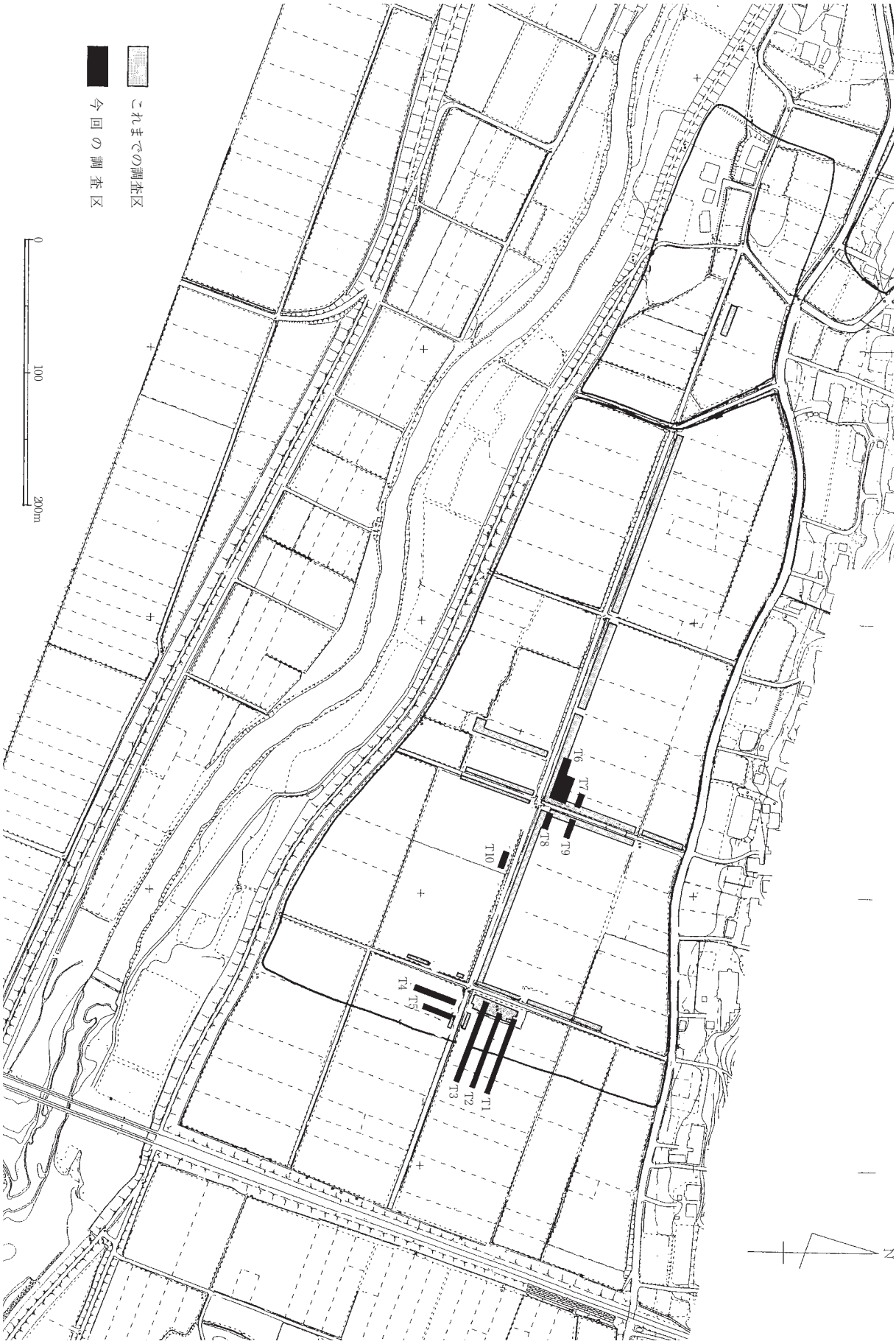
今回の調査はこれまでの成果をふまえ、第８次調査の28区で検出された材木塀（SD－96）による区画施設周辺（東区）と８次調査で検出された二間五間の大型の掘立柱建物跡（SB－19）の周辺（西区）を対象地とし、東区では区画施設の全体規模やその中に予想される建物群の構成を把握することを、西区ではSB－19周辺に規格や配置に同様の計画性をもつ掘立柱建物跡が存在するかどうかを確認することを目的とし、合計10本（約1,300㎡）のトレンチを設定した。（第２図）

なお、今回調査の東区T1～3調査区の西端部分は平成15年に調査された第28調査区と重複するもので、その部分からは前回の調査で検出された遺構が再度確認されるはずであったが、検出されたのは材木塀（SD－96）の北西隅部分のみで、他の遺構はすでに削平されていることが判明した。このことは前回調査時の遺構確認高が約5.9mだったのに対し、今回遺構を検出した標高は約5.6mであり、前回と比し地山面が約30cm削平されているもので、遺構の残存状況を加味すると大部分の遺構はほ場整備事業に伴う工事により消失したものと考えられる。こうした事を踏まえ、11月15日に栗原地方振興事務所・栗原市文化財保護課・県文化財保護課の三者によりこれまでの事実確認と再発防止について協議を行い、12月６日付けで今後の予防策とともに発掘通知が提出された。

## Ⅲ　調査の方法

調査は前述した目的を達成するため、東区ではT1～5の調査区を、西区ではT6～10の調査区を設定して重機による表土除去、ケズリによる遺構確認作業を行った。

耕作土（15～20cm）の直下で地山となるロームおよび風化した凝灰岩が表れ、この面で遺構の確認を行い、その結果、材木塀の北西隅部分、土壙・井戸跡各３基、溝跡、小ピット（柱穴）多数を検




第２図　調査区の位置

出した。検出された遺構は基本的には掘り下げは行わず、遺構の性格を把握する上で必要なものと残存状況を確認するものについてのみ断ち割りを行った。調査区や遺構の平面形は電子平板によって作成し、掘り下げを行った遺構については随時1/20の平面図と断面図を作成した。なお、平面図の作成においては、任意の２点（基準点１．２）を結び南北の基準線とし、この線上で基準点２から南に60m離れた地点で直交する線を東西の基準線として、この交点を東西南北の原点とした直角座標を用いた。

基準点の座標（世界測地系　第Ｘ系）は次の通りである。

基準点１　Ｘ＝－150329.309　Ｙ＝20790.944

基準点２　Ｘ＝－150101.341　Ｙ＝20872.620

## Ⅳ　調査の成果

発見された遺構や遺物については東区と西区に分け、それぞれの調査区毎に記していく。

**東区**（第３～５図）

［T1調査区］

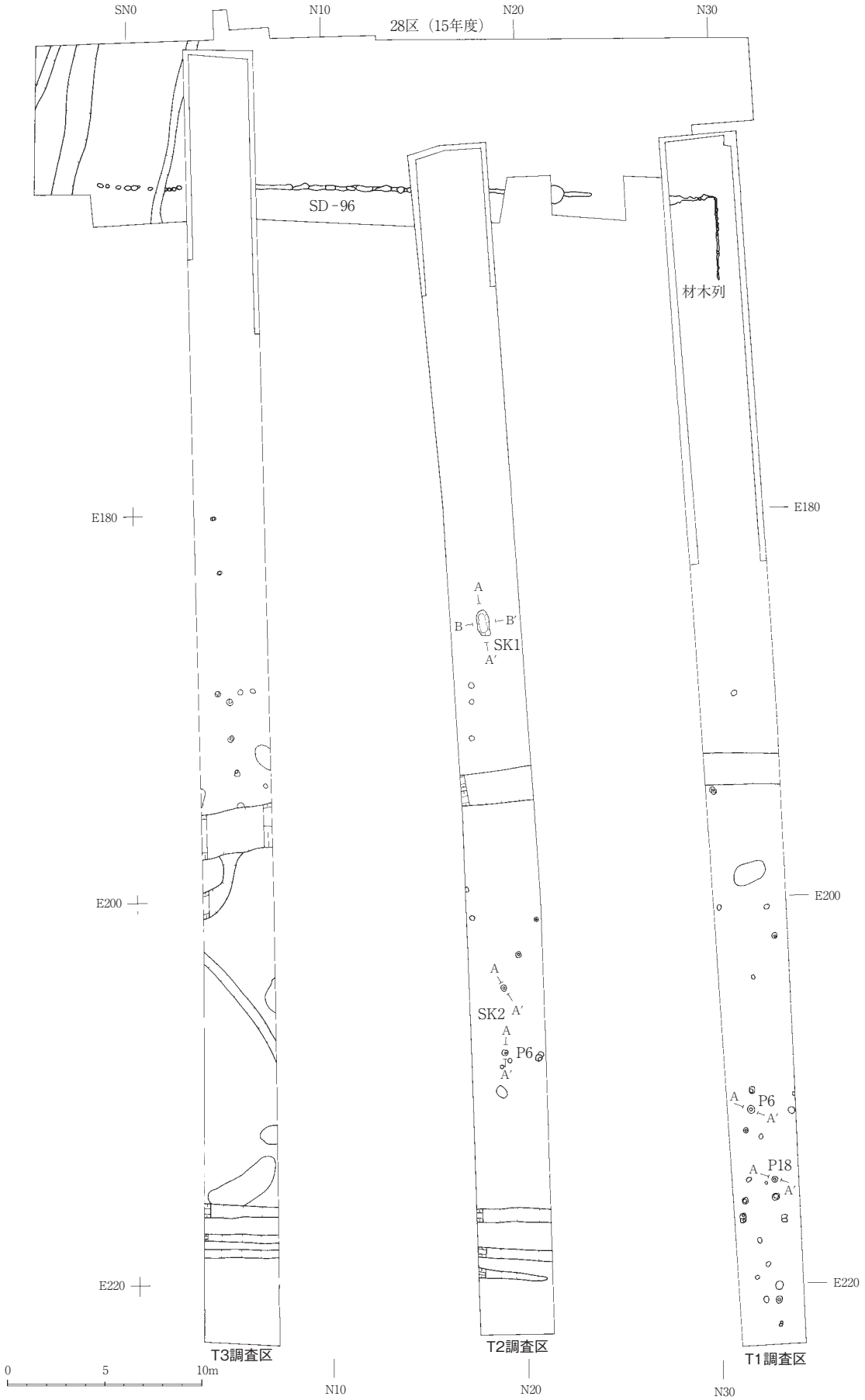
８次調査で検出された材木塀（SD－96）の北西隅の再確認と北辺から北東隅の検出を目的とし、区画の北辺部分が調査区の中心に位置するよう幅４ｍ長さ63ｍの東西に長い調査区を設定した。その結果、材木塀（SD－96）の北西隅部分と溝跡１条、土壙１基、小ピット28個を検出した。

材木塀は前回調査では20～30cmの溝状の落ち込みとして検出されたが、今回検出された部分は全体的に残存状況が悪く、北辺では深さ数cm残るのみで、西辺は痕跡と考えられる「染み状」の土色の差異を確認したにすぎない。確認された部分の長さは西辺2.5m、北辺4.4mで、北辺のさらに東側部分は検出されておらず、全体の規模は不明である。また、北辺では溝状に延びる黒色土の中に直径10cm程度の円形の落ち込みが20cm間隔で連続的に並ぶことが確認されており木材の痕跡と考えられる。（写真図版１）

小ピットは調査区東側で比較的集中して検出されている。これらの中には柱痕跡を持つものもがあり建物跡の一部をなすものと考えられるが、全容については不明である。断ち割りを行ったP6・P18は円形を呈し、直径は約30cmで、深さはP6が約30cm、P18が約30cmある。いずれのピットからも中央から柱抜き取り痕が検出されている。

［T2・3調査区］材木塀の西辺の再確認と区画内部の建物群の検出を目的とし、T1調査区と平行しそれぞれ９ｍの間隔を取りT2･T3調査区を設定した。調査区はいずれも幅４ｍで、長さはT2が61ｍ、T3が67mである。

T2調査区では溝跡４条と土壙１基、土器埋設遺構１基、小ピット14個が、T3調査区では溝跡５条と小ピット９個、不整形の落ち込み５箇所が検出され、土壙と土器埋設遺構については掘り下げを、溝跡については一部断ち割りを行った。また、区画の西辺部分は位置的に再確認されるはずであったが、今回の調査では確認に至らなかった。このことは前回の遺構確認面の標高が約5.9mであるのに対し、T2・T3調査区の西側部分の標高はそれぞれ5.64m、5.52mであり、前回調査時と比べと30～




第３図　遺構配置図（1）T1～T3

40cm下がっていることにより遺構が削平・消失したものと考えられる。

T2P6は隅の円い方形を呈し、一辺約30cm、深さ約30cmである。ピットの西壁に寄った部分から柱抜き取り痕が検出されている。

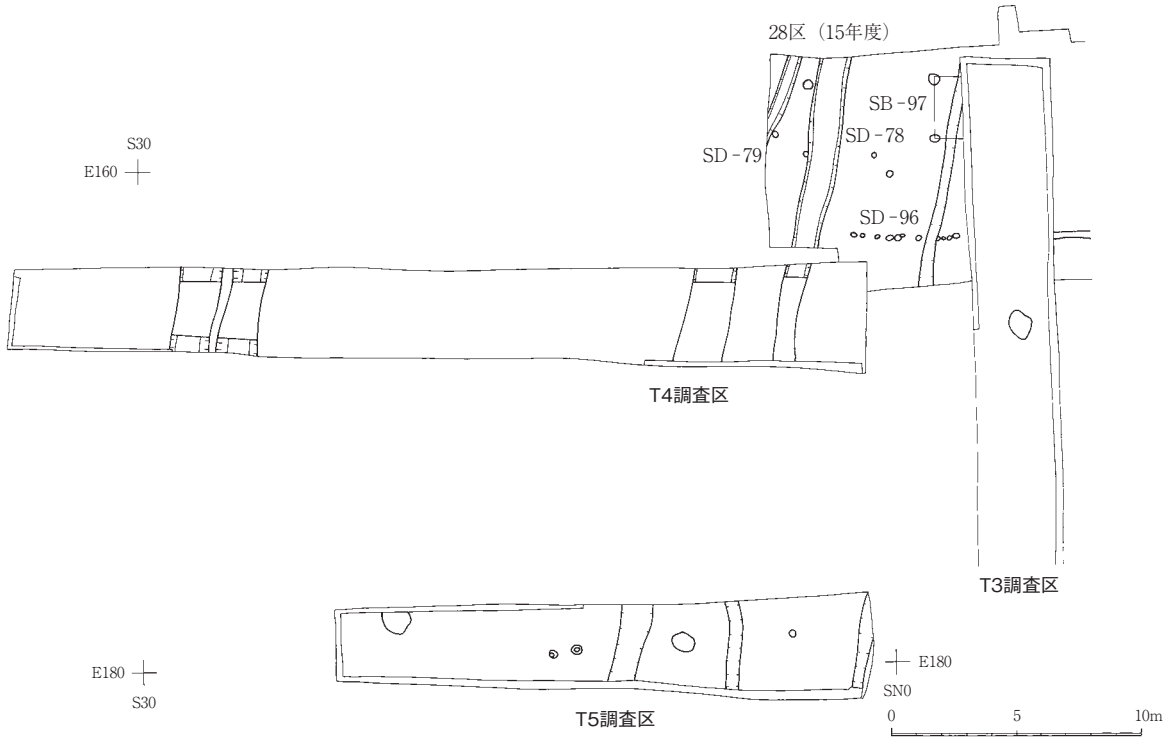
T2SK1は長円形の土壙で、大きさは長さが1.35m、幅が60cm、深さが25cmある。堆積土は３層確認され、下位の２層は人為的な埋土と考えられる。１層の下面から土師器甕が１個体分出土している。製作にロクロを用いず、長胴形を呈するもので体部の外面はヘラケズリ、内面はヘラナデされている。８世紀代のものと考えられる。

T2SK2は直径約30cmの円形の土壙で、中から土師器甕と赤焼土器坏が「入れ子」になった状態で出土している。遺構のほとんどは削平を受けており、深さは６cm足らずである。甕はロクロを使用したもので底部に回転糸切り痕が残る。10世紀初頭頃のものと考えられる。

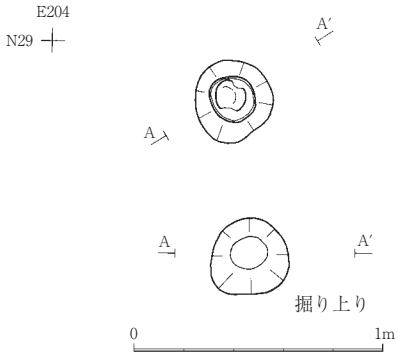
溝跡は５条検出されている。

この中で、中央の溝はT1調査区でも検出されており南北30m以上にわたって確認されたことになる。堆積土はグライ化した黒褐色の砂質シルトで、本遺跡の古代の遺構に特徴的にみられるしまりのない黒色土とは異なることから中世以降のものである可能性が高い。

調査区の東端で３条の溝跡が検出されており、南北約18mにわたって確認された。材木塀の西辺と並行することから、区画施設の東辺の可能性も考えられたが、断ち割りを行った部分では断面形が皿状を呈すること（SD96の断面形は箱形）や堆積土（グライ化した灰黄褐色の砂質シルト）が古代のものの特徴とは異なることから、中世以降の溝であると考えられる。

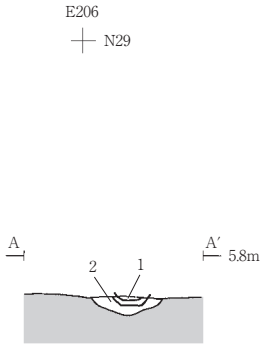



第４図　遺構配置図（2）T4～T5

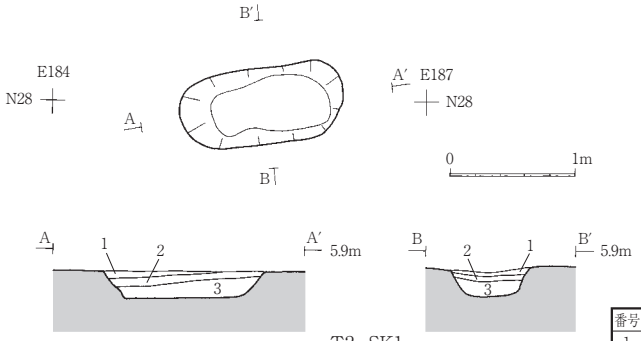



T2-SK2

1　10YR2/2 黒褐色　シルト

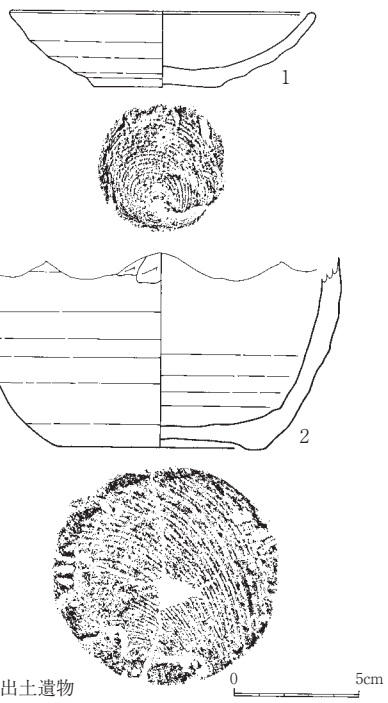



2　10YR2/2 黒褐色　シルト



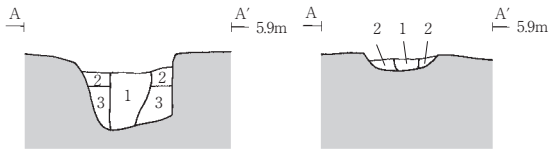

T2-SK1

| 層位 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR2/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 自然堆積土？ |
| 2 | 7.5YR3/3 暗褐色 | 粘土質シルト | 自然堆積土？ |
| 3 | 7.5YR3/2 黒褐色 | 粘土質シルト | 径１～５cmの地山ブロック多く含む。人為的埋土。 |




T2-SK2出土遺物

| 番号 | 種　類 | 口径 | 底径 | 器高 | 調　整 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 赤焼土器　坏 | 12.3 | 4.9 | 3.0 | 内外：ロクロナデ　底：回転糸切り |
| 2 | 土師器　甕 | | 8.5 | (7.7) | 外：ロクロナデ+ヘラケズリ　内：ロクロナデ　底：回転糸切り |

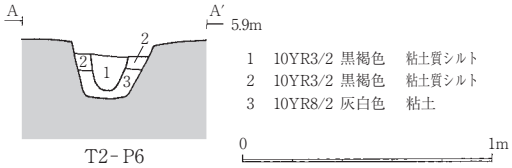



T1-P6

1　10YR2/2 黒褐色　粘土質シルト
2　10YR3/2 黒褐色　粘土質シルト
3　10YR7/4 にぶい黄橙色　粘土質シルト

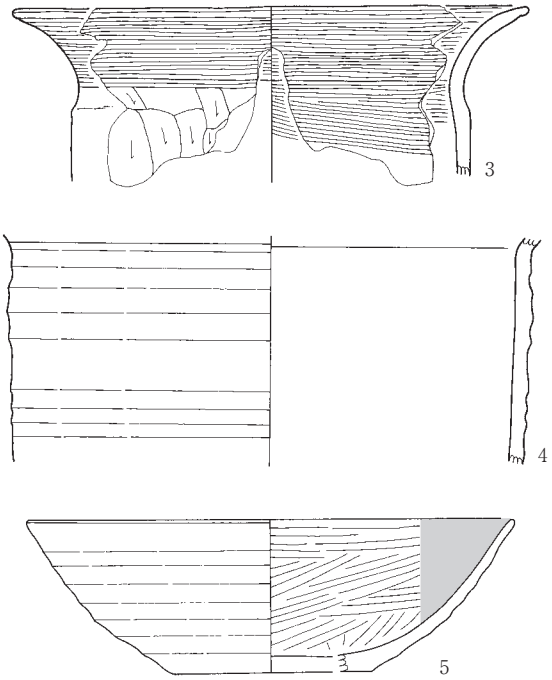
T2-P18

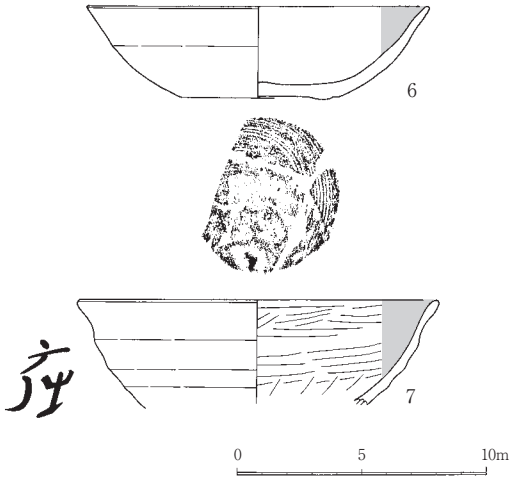
1　10YR3/2 黒褐色　粘土質シルト
2　7.5YR2/2 黒褐色　粘土質シルト




T2-P6

1　10YR3/2 黒褐色　粘土質シルト
2　10YR3/2 黒褐色　粘土質シルト
3　10YR8/2 灰白色　粘土




| 番号 | 調査区 | 層位 | 種　類 | 口径 | 底径 | 器高 | 調　整 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | SK－1 | 1 | 土師器　甕 | 20.6 | | | 口内外：ヨコナデ　体外：ヘラケズリ　体内：ヘラナデ |
| 4 | T5 | 1 | 土師器　甕 | | | | 体外：ロクロナデ |
| 5 | T4 | 1 | 土師器　坏 | 19.6 | 8.0 | 6.0 | |
| 6 | T5 | 1 | 土師器　坏 | 13.8 | 6.1 | 3.6 | 外：ロクロナデ　内：ミガキ＋黒色処理　底：回転糸切り |
| 7 | T5 | 1 | 土師器　坏 | 14.6 | | (4.3) | 外：ロクロナデ　内：ミガキ＋黒色処理　「産？」の墨書 |

第５図　東区の遺構と出土遺物

［T4・5調査区］

T4調査区はT1調査区で検出された材木塀西辺の南側の延長部分に設定した調査区で、区画の南西隅部の検出を、T5調査区では南辺の検出を目的とした。調査区の幅は3.5mで、長さはそれぞれ35m、21mである。調査区全体に暗渠の溝が網目状に巡らされており、遺構の残存状況は非常に悪い。

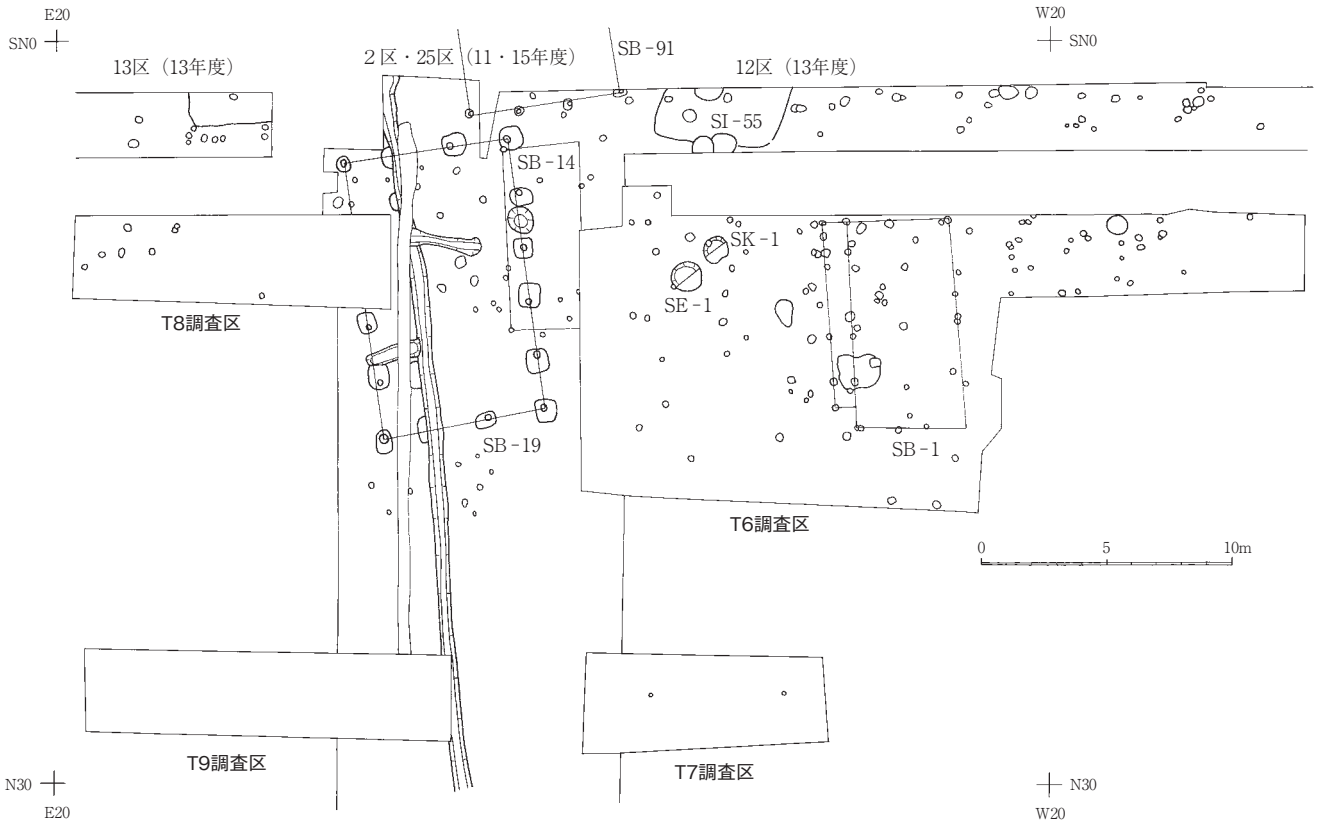
それぞれの調査区から溝跡が３条ずつ検出されているが、堆積土の特徴から中世以降のものである可能性が高い。材木塀の西辺および南辺は検出されなかった。

**西区**（第６～８図）

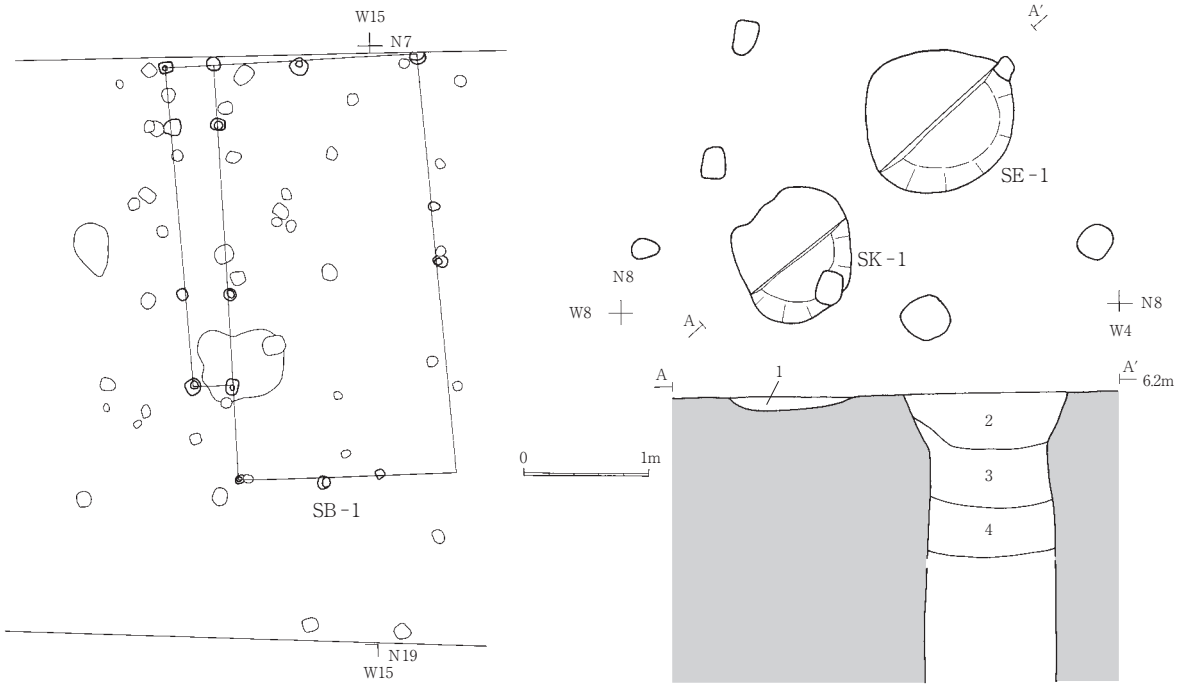
［T6～9調査区］（第６．７図）

８次調査等で検出された2間5間の大型の掘立柱建物跡（SB19）の周辺地を対象とし、これと関連する建物や施設の有無を確認することを目的とした。その結果、T6調査区で掘立柱建物跡１棟、井戸跡２基、不整の落ち込み３箇所、ピット多数が、T7ではピット２個、T8ではピット８個が検出された。

掘立柱建物跡（T6SB1）は梁行二間、桁行四間の南北棟で東側に庇が付く。規模は桁行が東側柱列で南から1.3m、3.3m、1.8m、1.8mで総長8.2m、梁行が南側柱列で西から2.4m、1.8mで総長4.2mである。東側柱から約１m東側に庇が取り付いている。柱穴は円形を呈し、直径は20～30cmである。建物の時期については、柱穴が円形で小形であること、建物の方向が以前検出されたSB14・SB91とほぼ同一であるなど特徴が類似するもので、これらの建物の同様に中世以降のものと考えられる。

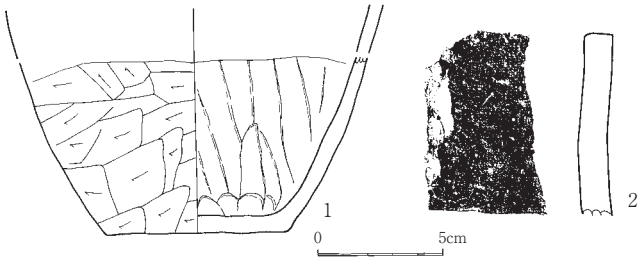



第６図　遺構配置図（3）T6～ T9

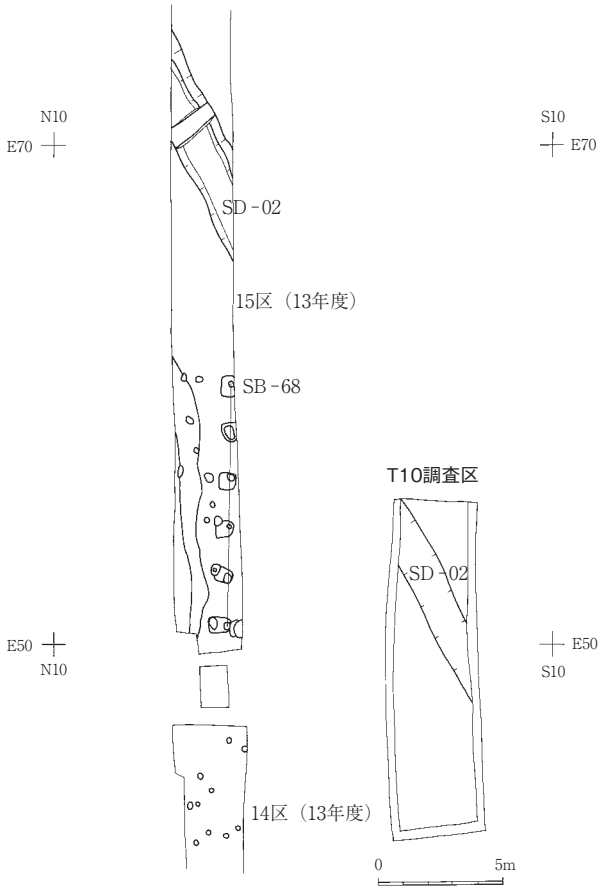



| 層位 | 土　色 | 土　性 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 7.5YR2/2 黒褐色 | シルト | 径２～４cmの地山ブロック多く含む。自然流入土。 |
| 2 | 7.5YR2/2 黒褐色 | シルト | |
| 3 | 7.5YR2/2 黒褐色 | シルト | 径２～６cmの地山ブロック多く含む。自然流入土。 |
| 4 | 7.5YR3/1 オリーブ黒色 | 粘土質シルト | グライ化が進んでいる。 |

| 番号 | 遺構名 | 層位 | 種　類 | 口径 | 底径 | 器高 | 調　整 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SK－1 | 1 | 土師器　甕 | | 7.3 | (7.0) | 外：ヘラケズリ　内：ヘラナデ |
| 番号 | 遺構名 | 層位 | 種　類 | 幅 | 長さ | 厚さ | 備　考 |
| 2 | SE－1 | 1 | 転用硯 | (4.1) | (7.1) | 1.1 | 須恵器甕の体部破片を利用。約1/4残存。 |




第７図　西区の遺構と出土遺物




第８図　遺構配置図（4）T10

ピットの中にはT6SB1以外にも柱痕跡や柱抜き取り痕を持つものもあり、建物の一部と考えられるものも認められた。また、柱穴はいずれも円形を基調としているもので規模も大きくても40cmを越えるものはなく、SB19のような方形を呈して一辺１m程度の掘方をもつような柱穴は検出されなかった。

T6SK1は直径約１mの円形の浅い落ち込みで、断面形は皿状を呈し、深さは約10cmである。堆積土は黒褐色のしまりのないシルトで、土師器甕が出土している。

T6SE1は直径約1.2mの円形の素掘りの井戸で、断面形は上に向かって開く「漏斗状」を呈している。深さは、約1.3mで湧水のため掘下げを断念したが、ここからピンポールを刺してみたところ１m以上刺しても底面に到達しないことから、2.3m以上ある

ものと考えられる。堆積土は黒褐色のしまりのないシルトで地山ロームの小さなブロックを多く含んでいる。

土中から須恵器体部を利用した転用硯の破片（約1/4）が出土している。

［T10調査区］（第８図）

３次調査で検出されたSB68掘立柱建物跡の全体像を把握する目的で、第15区の南側に調査区を設定した。その結果、２次調査の３区で検出されたSD02の延長部分が検出された。SB68掘立柱建物跡の延長部分は調査を行った水田は北側の水田よりも田面が一段低く、すでに遺構が削平された可能性があり、どのように展開するかは解明できなかった。

## Ⅴ　ま　と　め

１．本調査は、暗渠排水工事に先立って行われた遺構確認調査である。

２．調査はこれまでの成果をふまえ、屋敷跡の区画と考えられる材木塀（SD－96）の全体規模やその中の構成を把握すること（東区）、大型の掘立柱建物跡（SB－19）の周辺に同様の計画性をもつ掘立柱建物跡が存在するかどうか（西区）を確認することを目的とした。

３．東区では、調査区周辺はこれまでの土取りや開発行為により大きく削平されており、材木塀の北西隅部分が検出されたのみで区画の全体規模については解明できなかった、また区画内からは材木塀と同時期（10世紀初頭頃）の遺構は土器埋設遺構（T2SE2）が検出されたのみである。

４．西区ではSB－19の周辺には同様の規模・計画性をもつ掘立柱建物跡は検出されたなかった。

５．10世紀初頭頃の本遺跡の性格は材木塀による区画や大型の掘立柱建物跡の存在から一般集落と異なるものと指摘されている。本調査でも転用硯など官衙的色彩をもつ遺物が出土しているものの全体的な遺構群の構成を掴むことはできなかった。

### 【引用・参考文献】

瀬峰町教育委員会：1983　「大境山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第４集

瀬峰町教育委員会：2000　「桃生田前遺跡・下富前遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第19集

瀬峰町教育委員会：2002　「下富前遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第20集

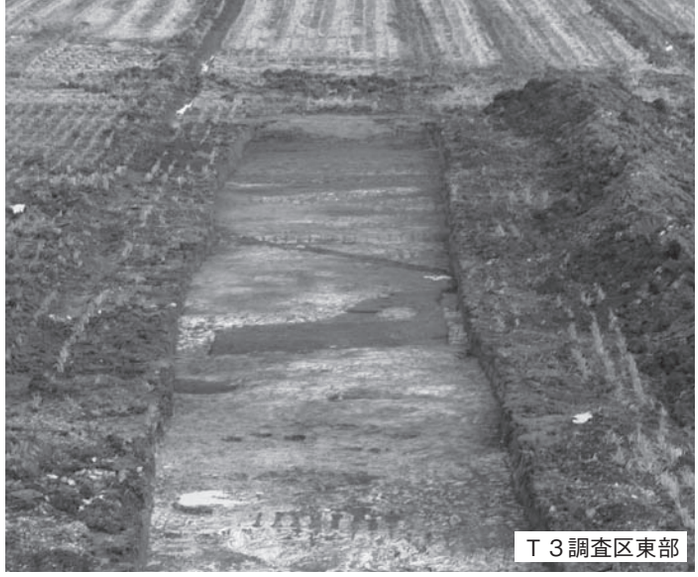
瀬峰町教育委員会：2004　「下富前遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第23集

# 写　真　図　版

上：遺跡全景
中：Ｔ１調査区
（西から）
下：材木塀北西隅

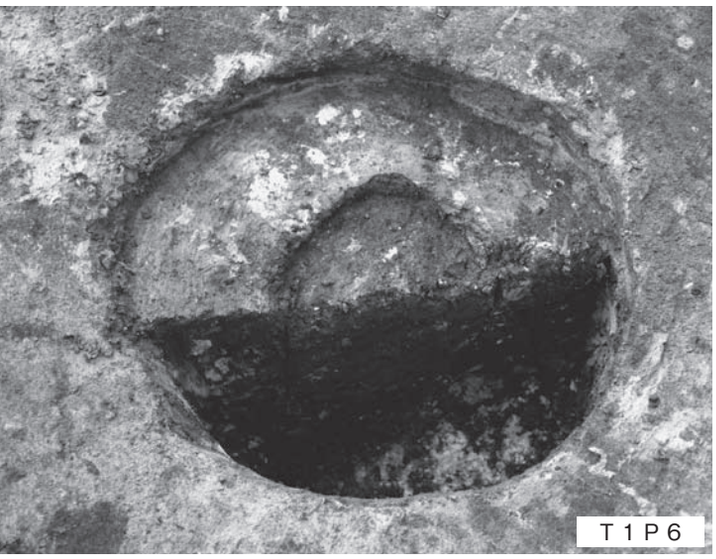
図版１

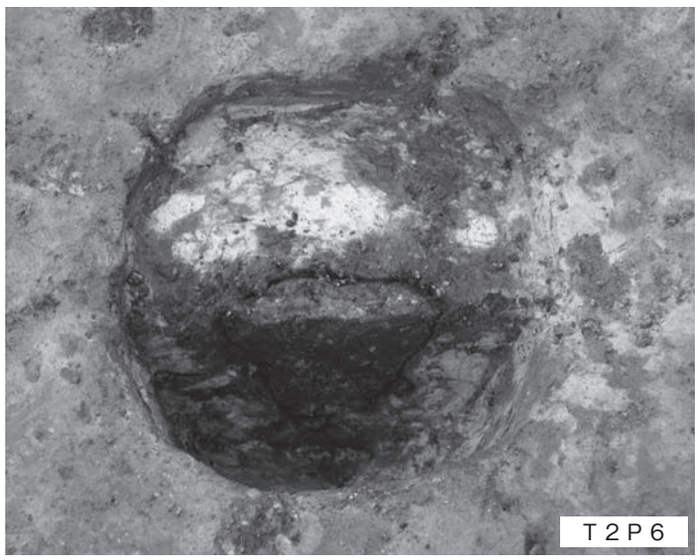
Ｔ２調査区

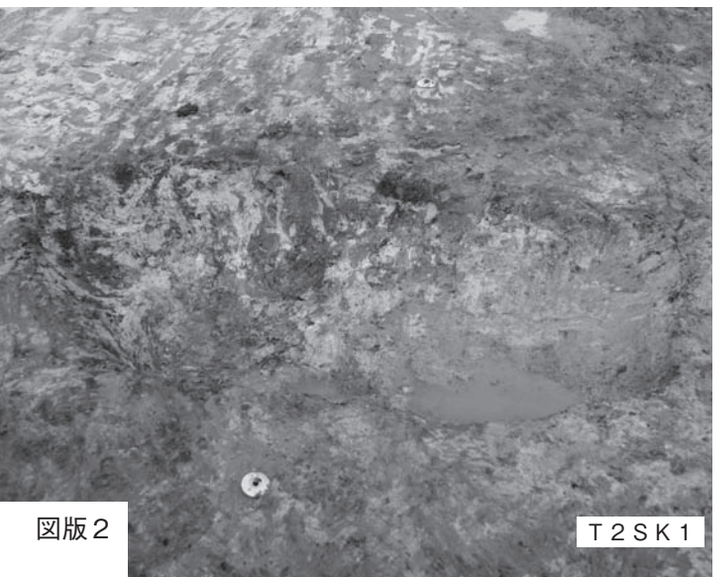

Ｔ３調査区東部

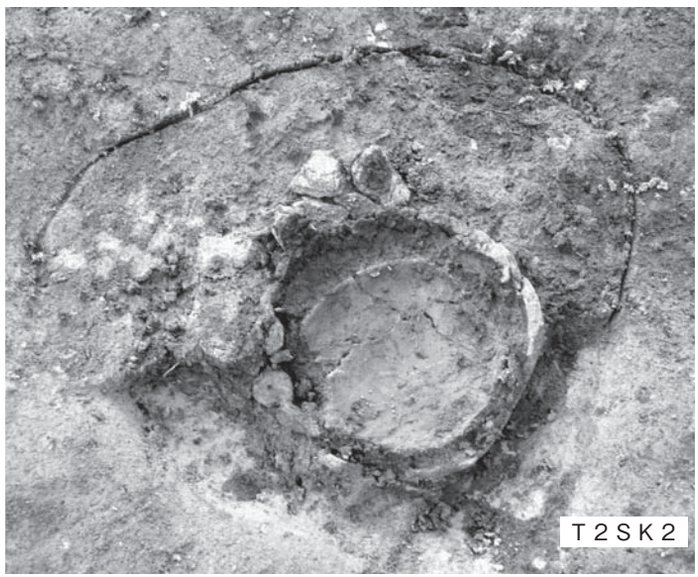
Ｔ４調査区

Ｔ５調査区


Ｔ１Ｐ６

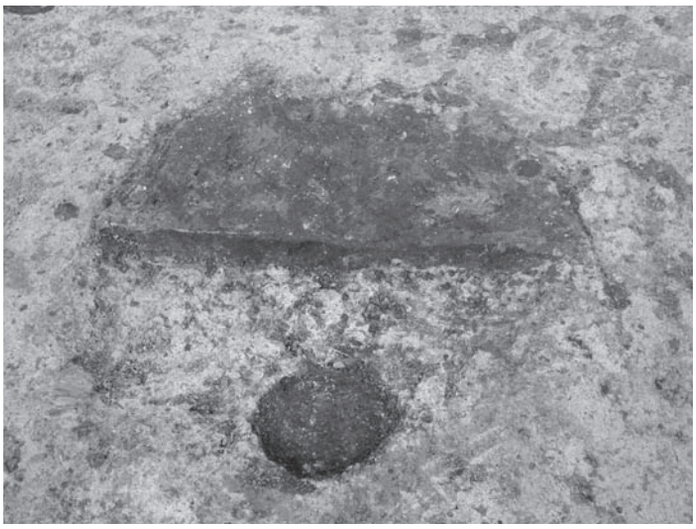

Ｔ２Ｐ６


Ｔ２ＳＫ１


Ｔ２ＳＫ２

図版２

上：Ｔ６調査区
（東から）
中：Ｔ10調査区
（西から）
下右：Ｔ６ＳＥ１
下左：Ｔ６ＳＫ１



図版３

上：調査風景　　下：出土遺物

1　第５図６　　2　第５図１　　3　第５図７　　4　第７図２　　5　第５図２

図版４

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | しもとみまえいせき |
| 書名 | 下富前遺跡 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 宮城県文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第212集 |
| 編著者名 | 菊地逸夫 |
| 編集機関 | 宮城県教育委員会 |
| 所在地 | 〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目８－１　TEL 022－211－3682 |
| 発行年月日 | 西暦　2007年３月23日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| しもとみまえいせき<br>下富前遺跡 | くりはらしせみねまちおおさと<br>栗原市瀬峰町大里<br>あざしもとみまえ<br>字下富前 | 042137 | 46047 | 38°<br>44′<br>23″ | 141°<br>17′<br>38″ | 2006.10.30<br>～11.24 | 約1,300㎡ | ほ場整備事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 下富前遺跡 | 散布地 | 奈良・平安 | 掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土壙・材木塀跡 | 土師器・須恵器・赤焼土器 | |

宮城県文化財調査報告書第212集

下 富 前 遺 跡

平成19年３月19日印刷
平成19年３月23日発行

発　行　宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号

印　刷　株式会社　東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24-24

宮城県文化財調査報告書第212集

# 下富前遺跡

平成19年３月

宮城県教育委員会

宮城県文化財調査報告書第212集
下富前遺跡
平成十九年三月
宮城県教育委員会